

2010.6.9(水)

シンガポール、タイ、韓国などのアジア諸国が力を入れる医療観光。徳島県では産学官が連携し、糖尿病は産学官が連携し、糖尿病検診・治療に関して新たなビジネスチャンスの創造をもくろみ、中国・上海の富裕層を狙う。これを軌道に

動き出す 医療観光

④

乗せるには、徳島での検診受診者が帰国後に糖尿病治療を受けられる体制整備が不可欠だ。

県訪問団の一員として上海を訪れていた船木真理・徳島大学病院糖尿病対策センター教授は5月24日、上海交通大学第一人民医院に足を運んだ。

徳島大では、帰国後の医療対応について、携帯電話などを活用した遠隔指導も計画しているが、患者にとって一番重要なのは身近な医師によるケア。訪問の狙いは、帰国後の治療や投薬について上海交通大学に協力を求めることだった。

船木教授は、上海でも有数の糖尿病の権威である内分泌代謝科の彭永徳教授と面会。県の医療観光構想を説明し、受診者のケアに協力してくれるよう要請した。これに対し、彭教授は「徳島大学病院と協力すれば中国に約9200万人いる糖尿病患者の治療水準も高まる」と話し、連携に前向きな姿勢を示した。

会談を通じて上海の糖尿病治療の現状も分かった。上海では日本と異なり、糖尿病治療に薬剤師や栄養士が深くかかわる体制が普及しており、多忙な医師が

上海交通大と協力関係も



徳島大学病院の糖尿病検診の特徴を上海の旅行者に説明する船木教授(左)ら＝5月24日、オークラガーデンホテル上海

服薬や食事指導までこなすため患者は必ずしもきめ細かなケアを受けていない。「日本の丁寧な医療サービスは高く評価される」。船木教授は確信した。彭教授との会談後、船木教授は上海の旅行業者向け商談会でプレゼンテーションに立った。患者の糖尿病の遺伝的背景まで調べられるなど、世界最先端の検診を受けられる徳島大学病院の先進性を強調。続く個別説明会では、帰国後の受診者の治療体制について質問が相次いだのに対し「上海交通大と協力する話が進展している」と繰り返し説明した。

さらに、業者に配った資料ではがん検診に必要な料金や所要時間も示した。がん検診を主体にした医療観光は、日本の旅行者などが長崎や新潟で先行して取り組んでおり、中国人富裕層にも利用されている。糖尿病を中心としながら幅広い患者を受け入れることで、観光客を増やす効果を狙っている。1回の来日で100万円以上の買い物をするといわれる上海の富裕層の来県は、不況に苦しむ徳島の観光・商業関係者にとって干天の慈雨だ。

商談会后、船木教授は「最高のタイミングで上海交通大との協力が決まり、旅行者にも納得してもらえた」と手応えを語った。ただ、徳島大学病院だけが検診を担う現状では、多数には対応できず「県医師会と協力した受け入れ拡大や、上海交通大と連携した帰国後の治療体制整備を急ぎたい」と表情を引き締めた。

(政治部・佐藤 亮)

検査体制 帰国後のケア重要